居酒屋の作家

山本容朗

居酒屋の作家

山本容朗

潮出版社

居酒屋の作家

定価　九八〇円

昭和五十七年十一月　十　日　印刷
昭和五十七年十一月二十五日　発行

著　者　山本容朗
発行者　富岡勇吉
発行所　株式会社　潮出版社
東京都千代田区飯田橋三―一―三
電話　東京(03)230〇七四一(販売部)
230〇七八一(編集部)
振替　東京　五―六一〇九〇
郵便番号　一〇二
本文印刷　明和印刷株式会社
付物印刷　栗田印刷株式会社
製　本　株式会社鈴木製本所

(乱丁・落丁本は送料弊社負担でお取り替えいたします。)

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは，法律で認められた場合を除き，著作者および出版社の権利の侵害となりますので，その場合には予め小社あて許諾を求めて下さい。

© Y. Yamamoto 1982 Printed in Japan

居酒屋の作家　目次

浅草は「猿之助横丁」から……7
渋谷は宮益坂の中華料理店……15
深川は祭りばやしと人情酒……23
麻布界隈のそば屋をハシゴ……31
室町「砂場」での石川淳さん……38
＊泥酔の話……46
＊「三四郎」の赤酒……53
＊酔ざめ日記……60
築地いいとこ橋づくし……67
本郷での今東光さんの艶聞……75
鐘は上野か浅草か……82
両国はお相撲さんのいる風景……90
＊味散歩……98
＊酒量について……105

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

＊大散歩・小散歩……113
今は昔、名残りの玉ノ井泪橋……121
春の宵、根津藍染町の酒の味……129
神田神保町に「龍宮」ありき……137
牛込地区は文豪のまち……145
＊焼跡闇市・あとさき……153
＊好きなのは食べ歩き……160
＊再び酒量について……168
吉行兄妹は番町育ち……173
終点、三輪橋の〝焼酎ソーダ〟……180
いまは昔、花の吉原仲之町……188
中央線の文壇はしご酒コース……196
あとがき

イラスト　佐々木侃司
装　丁

居酒屋の作家

浅草は「猿之助横丁」から

六月のある月曜日、私は地下鉄（銀座線）の田原町駅を降りた。この駅を降りて、地上に出ると、いつも明るい、そして解放された気分に襲われるのだ。

昭和十五年、小学校三年ごろから私は、なぜか学校が休みになると深川・平野町の叔父の家にいた。そして、そんな私の休暇中の生活は五、六年続いた。年齢で云うと、九歳から十四歳にかけてである。

少年の私は、浅草で映画を見ることがなによりの楽しみで、そのために叔父の家に来ているといってもよかった。夏など、休みが終って埼玉県といっても群馬に近い町にあった家に帰るとき、映画のパンフレットを重ねると五センチぐらいの厚さになった。私はそれを宝物のように大事にボール箱に入れていた。

深川から市電で厩橋まで行き、そこから歩くこともあったが、私は市電で日本橋へ出て地下鉄に乗り換え、田原町駅を降り、地上に出るコースが好きだった。

田原町から地上に出て感じる、明るい解放的な気分は、私が少年時代から持ち続けているものと云っていい。

私は国際通りを仁丹塔を左に見て、雷門へ出る大通りに出て、通称すしや横丁へ入る。左に「すし初」、ななめ右前に「入山せんべい」の看板が見える。

この五、六年、私はこの町へくると、帰りに「入山せんべい」を買って帰るのだが、この店に山口瞳さんの色紙がかかっていた。

「時雨るるや……」で始まる山口さんの句を思い出そうとしたが思い出せない。そのせんべい屋をのぞいて確認しようと思ったら、シャッターが下りていた。

私の手元には浅草の会編『浅草双紙』(未央社)という本があり、そのなかに昭和十四年十月一日現在の「浅草絵図」が一枚別刷で入っている。

これは、私が歩き始めた浅草と近い。私は、その絵図を頭に描く。すしや横丁を抜けると六区の映画街である。

日本館の前に「大東京」という映画館があった。そこは大都映画を上映していて、私は、高垣眸原作の「まぼろし城」を見た。この小説は、『少年倶楽部』に連載され、私の胸を熱くした時代小説だった。確か三部作ぐらいの映画で、私は続篇のかかるのを心待ちにしていて、初日にこの映画館に通った。主演は原健作(のちに健策)だった。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

大東京、松竹館、帝国館、富士館と、その昭和十四年の「浅草絵図」は映画館の名前を教えてくれる。東宝の封切館は富士館だったろうか。

夏で、私は下駄ばき半ズボンで開襟シャツに登山帽という格好で富士館のキップ売場の前に並んだ。

泉鏡花原作の「白鷺」という映画で入江たか子、山田五十鈴など当時人気の美女たちが総花的に主演していた。

私は美女たちにあこがれを抱いていたのだろう。しかし、この映画は十八歳未満入場おことわりだった。

十八歳には、とても不足な私は、登山帽を深くかぶり、手だけ出してキップを買った。館内は超満員だった。富士館の前は電気館で、ここは新興キネマの封切館だった。

そこで……なんて、書いていくと、いつになっても私の回想は終りそうにない。

さて六月に訪れたこの日で私は今年（昭和五十五年）浅草は二度目だった。五月の十八日の日曜日、三社祭を見物に配偶者と二人で来たのである。

私は、田村隆一さんの「ぼくの『三社祭』酩酊記」（河出書房新社『書斎の死体』収録）を愛読していた。

田村さんは、祭りのクライマックスを雷門横の雷オコシの二階のパーラーでビールを飲みながら見物するが、私も田村さんのマネをしてみようと思った。しかし、その日は、あいにく歌舞伎

座の〔夜の部〕を見なければならなかった。

三社祭の最高潮は、朝、町内へ繰り出した一の宮、二の宮、三の宮という三つの神輿(みこし)が夕方七時近くなって帰ってくる場面である。神輿が出て行くことは「宮出し」、帰ってくることを「宮入り」と云う。

田村さんは、三社祭独特の掛け声を、「オイサ、オイサ」、「オリャ、オリャ」、「オイサ、オイサ」と書いていた。

私は、その掛け声のなかを、人波のなかをくぐって歩いた。神輿も町内の小さな神輿も見た。「あそこの牛肉のこまぎれは安くてうまいのよ」なんて云って配偶者は、ある肉屋の前へ行ったが、大変な行列だったのであきらめたりした。

私は人混みをさけて、姥ケ池の旧跡、そこにある助六の碑、駒形堂、駒形どぜうの前にある久保田万太郎の句碑、

神楽まつまのどぜう汁すすりけり

などを見た。不服そうな顔をしていたが配偶者はついてきた。

三社祭の日に比べて、この町の閑散さは、まるで別の町のようだ。だが、私の耳には、まだ、あの「オイサ、オイサ」、「オリャ、オリャ」といった掛け声が聞こえている。

いつのまにか、私は「松風」へ行く道を歩いていた。「松風」は新仲見世と公園通りが交叉する辺りにある。店内の貼り紙には「連れの方以外とは酌をし合わないでください。お酒はお一人三本まで」と書いてある一風変った店である。

「真澄」の樽酒に、玉子豆腐などで銚子を二本飲んで、その店を出た。外は、まだ明るい。

合羽橋のどぜうの「飯田家」へ行くことにする。

永井荷風、久保田万太郎、川端康成、武田麟太郎、高見順、浜本浩らは浅草を愛し、ここを舞台にした作品を発表した人たちである。それに万太郎は田原町生れで、『浅草記』(生活社)という著書もある。

現代の作家では、芝木好子さんが浅草馬橋、池波正太郎さんが浅草聖天町生れだ。それに川口松太郎さんは浅草今戸の生れで、石川淳さんは浅草三好町。

吉村昭さんは日暮里の産だが、浅草が遊び場だった。ある時、私は吉村さんと吉祥寺で飲んでいてたまたま浅草の話になった。吉村さんは、「あらまさ」という店を知っている? と私に聞いた。「あそこでは、競馬の予想屋ということになっている」と、私が答えると、吉村さんは、「おれは株屋になったり、洋服屋になったりしているよ」と笑っていた。

あれは、いつだったろうか。「飯田家」から、「あらまさ」へ行こうとして、道を間違えてお寺の角へ立ち止まっていたことがあった。そのときは、一人だった。

そこで、私は石川啄木の「浅草の夜のにぎはいに　まぎれ入り　まぎれ出で来しさびしき心」という歌碑を見た。夕暮だった。あとで調べると、ここは等光寺で二十七歳で死んだ啄木の遺骨が一時ここに葬られていたことがあった。

啄木が浅草で遊んだのは二十三、四歳のころと思われる。それは『ＲＯＭＡＺＩ　ＮＩＫＫＩ』

（岩波文庫）に出てくる。彼は娼婦ともたわむれた。吉井勇の回想記『東京、京都、大阪』（中央公論社）にも、啄木と一緒に浅草、十二階下の私娼窟やら何やらを歩き廻る下りが出てくる。

十二階下の私娼窟と云えば、今東光の遺作になった『十二階崩壊』（中央公論社）は、ここを舞台にした、今東光の青春回想小説だった。

話は、どぜう屋にもどろう。

荷風の日記を見ると、この人は、一時、毎日というくらい、この飯田家へ来ている。

私は飯田家の二階で、どぜう（丸のまま）鍋、どぜうのかば焼、どぜう汁で、ビールを飲んだ。私がこの店へ来ると、いつも注文する通りの品目だ。それにしても、この家のどぜう汁は百五十円だが、うまい。

さて、ビールと日本酒、それにお腹にも少し入れたので、飲みにいくことになる。国際劇場の前から、花屋敷通りへ出て、ひさご通りへ出る。この道には、すきやきの「米久」がある。言問橋通りを渡って、千束通りを一本目の道を左に入る。私の行く古本屋があり、そこで、二、三冊本を買う。

店番のおばさんに「猿之助横丁」を聞くと、一本先を左に入ると教えられる。

行く先は、飲み屋「かいば屋」。

野坂昭如さんの『新宿海溝』（文藝春秋）には、「猿之助横丁」という一章があり、都筑道夫さんの『妄想名探偵』（講談社）にも「かいば屋」が登場するといった按配で、私は初めてだが、す

でによく承知している店なのだ。それに、田中小実昌さんの映画随筆にも、たびたび、この店の名前が出る。

都筑さんの小説集は読切連作という形式で、「かいば屋」が出てくるのは、「横丁『横丁』殺人事件」。それによると、大正後期、関東大震災が起るまで、この横丁には、銘酒屋が並んでいたらしい、という。銘酒屋とは、簡単に云うと娼婦のいる飲み屋だ。

「かいば屋」へ入る。ここの主人の熊谷幸吉さんは、早稲田（大学）の落語研究会を支えていた人で、一時、魚河岸に勤め野坂さんのマネジャーもやっていた。通称、〝クマさん〟である。

この店は初めてだが、彼とは新宿ゴールデン街で顔を合せている。クマさんは、私を憶えていた。店は、カウンターの椅子が七つに、三畳ほどの座敷が一つ。私は、焼酎を頼んだ。レモン割りである。

クマさんは凝り性で、焼酎一つにしても、市販のあらゆる焼酎を買って来て、飲んで見て売るヤツを決めたという話を友人から聞いた。トウモロコシを使ったつき出しも工夫のあとあり。

客は、私以外に二人いた。飲むうちにいい気分になってくる。クマさんは、「一見（いちげん）の客はほとんどない。十人来てくれて、三人ぐらいが二度目にくるくらい」とか、「店は五年になるけれど、開店の時にみんな、いつまで続くかと予想していたけれど、当ったやつが一人もいなかった」とか云ってニコニコしている。

野坂さんは、『新宿海溝』のなかで、この店の開店の様子を書いているけれど、その時集った人の名前を列挙すると、長部日出雄、佐木隆三、金井美恵子、黒田征太郎、殿山泰司、田中小実

昌さん。

クマさんから面白い話を聞いた。

ある日の六時ごろ、店へ一足先に出た奥さんから、「三畳に容貌魁偉な男が眠っていて気味が悪いから、来てくれ」という電話がかかってきた。

早速、クマさんがとんで来て見ると、どうやって入ったのか、酔った色川武大さんがちょっと一休みと眠っているのであった。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo